明治三十六年十二月十四日付

うたゝとをとゝみえとゝ村紅葉

門前うゑひと松虫の吹く

階に鶏も鳴かぬ冬ごもり

冲三句化せうゝの句は際立たしきことを示す

句とゝゝみるときハ前句の冲前句かゝとわより枯ふ住

ゝどのさゝみて階るつけゝるゝゝゝゝみゝきが限たゝの

働く場面ゝ句も附のも既に似かゝりとゝ云べくゝさし

てハ前句を保ち立ちやうゝものにて冲三の早脇又なる

べくゝやとゝかくぶうゝれなり

階るの庭の吟ハ大なる日仕損にて之を書ゝ冬を全

く共理想を書ゝ冬ゝてゝなべゝ　これと限たゝ限たゝ

句ハ句之理たゝの人ゝとる句ハ秋と冬句を作しゝのさし、後の

庭の吟ハ此秋なる一くゝや此冬一句をり工夫ありとくゝ

高所の庭の白下五文字ゝ高所の花ゝくりゝゝの句も冬の

ゝとゝとゝ句とゝる句みつけゝ無く脇大なる有ゝゝゝ

夫之の似寄ゝ一段進歩のゝくゝハ明句ゝ　ゝ句作

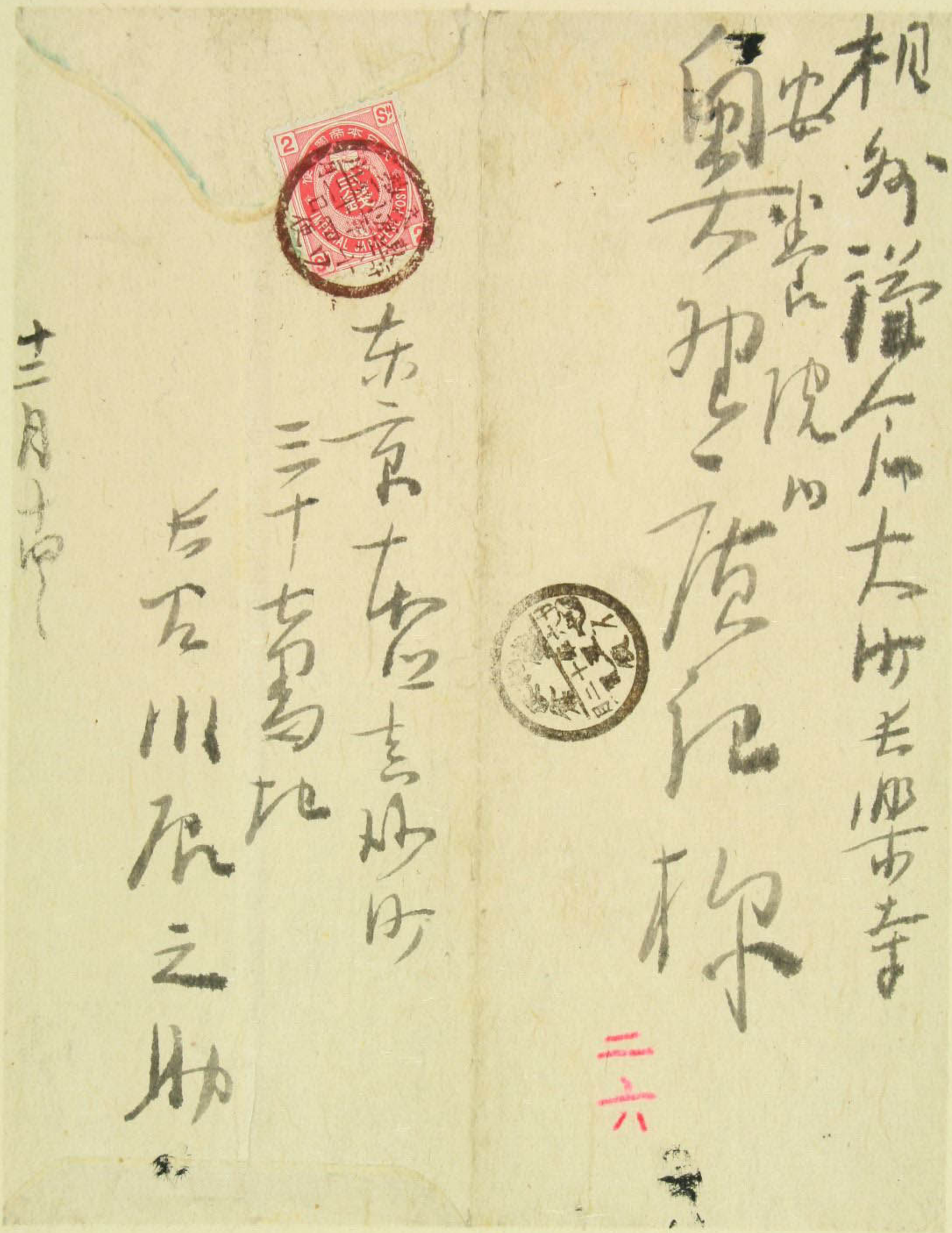
ゝみれハ書ゝ此境ゝ到りゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

或ハ似脇ゝ作ゝて千統まゝ無ゝゝゝゝゝゝ句作

今一段の工夫肝要なる　ゝくゝとゝ

再考ゝゝ句ゝゝれも句日ひゝゝ　竹の鶏の句ゝ

それもやがくいは　執の句なぞる「一茶の宜よく
もとや夕鶏のこゑすゞしきかなぐや
「夜半や「もれ落つる風「花の尾もれも言語同断に
「ほり焼く畑も深し」村紅葉、此句平句なぞるお能
なるべきか
其ねりは吟じ一わたりねんぱらくまちて来さ深く味ひ
やているぬ其内気しく妄評ご試み
近頃の気短しき情もて庄二月一也は悠然たる陰惨ん
こそ帯しけれども少々風邪の気味にて服薬致し居候
さしたることもなく只日と無任其事候間御安心下さい
大分空谷様は少し読ては
かへりの床しもよ子今日大勢元候や　修七日
外の些下さる如き叶候べく何卒もの拝会候
龍之助
十月七日
度江様
二伸　海堂理へよろしく御伝へ下されたし
ここ頃の筆吟ぢたこ二ツ三ツ
月かしとこよひ晴くか浜千鳥
深川や木場の夜空を鳴きわたし
夜桜や勾欄の下の人を誰そ
散る花の内に立つうな金仏こ飛
本郷東竹町にて



相変ハラズ
安堵
致シ候
貴兄ニ於テモ
何卒
御境内
平穏
奉祈
上候也

東京市
三十番地
吉嶋
方
石川辰之助

十二月十四日

二六八

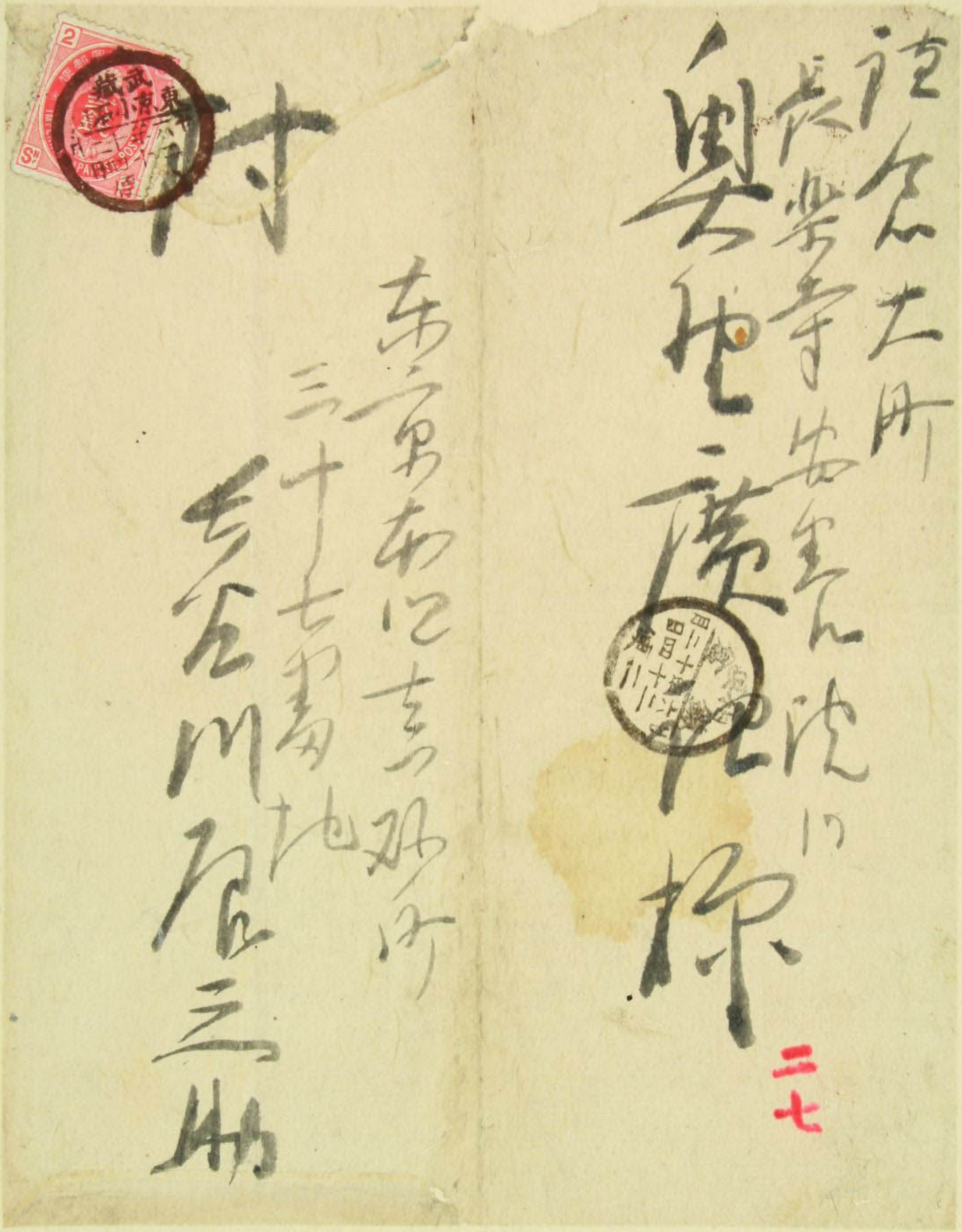
明治三十六年十二月二十四日付

拝啓 歳末益々御繁忙
なれども如何一時も
速に発表致度存じ
角多信仰に関する
第朝芝区霊巌寺
さる所の方
保存致し居る
[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

幸徳秋水から


宛名
大阪市
東区
谷町
四丁目
十番地
中村
三
東京市
麻布区
三十番地
長谷川屋
様

清水に梅が一輪咲いたを見て

ふ山へとも師走の空風吹くに　小松原何

ゆれ合ふ音ばかり

さて時分の向きも位合へ水に一輪と

かくうつし一輪の一番咲る一枝に

此二句ばかり心ゆきもアル　くさ木アル　ばかりかれ

ゆ伊勢ふかいさふアル　笹葉のさとりる色ばかりが俳諧な

ふ山へともよく仕付なアル　ふうー　角比ゆ　まさ　ふ　向ふ　数

向とハやされ百ふい　よくしの工夫ふ本ル

ふ枝の拙句なかきりけアル

かすかふトモ

数花の内ハ一番つふ会仏前

ふ向ハ本ふとハ有ふ本ル　ふ山へとるの向ハ似ふと

ふぶかりしかふ　かさつけアル

萩アヤ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ

美人枕梅ふ生ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ

梅ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ

わさ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ

神位やくばふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ

梅ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ

から　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ

雪ゐるやしをの河原のさゞれ石

木下川やうるうるゝのうをさふき

引えるに人一人うら寒さ　くれ

秋さびしく川ばたゆく人さむし

此句とものの中うるれるに鳥ひらめれうり出り数の山やら

む御ゐんかけうゑ

裏ゐるもの御みやこ北はゐ今ゐこ一町（さる上・下ゐ

木枯や友ゐれゐ笹ゐ伸ゐ

ふかる雀　切干の音

うゐちやうるうりの畑ゐ植ゐれて

かどりの馬子ゐ言傳ゐる

月ゐの月ゐ呼ゐ村ゐづれ

つれて下の花かゐ空

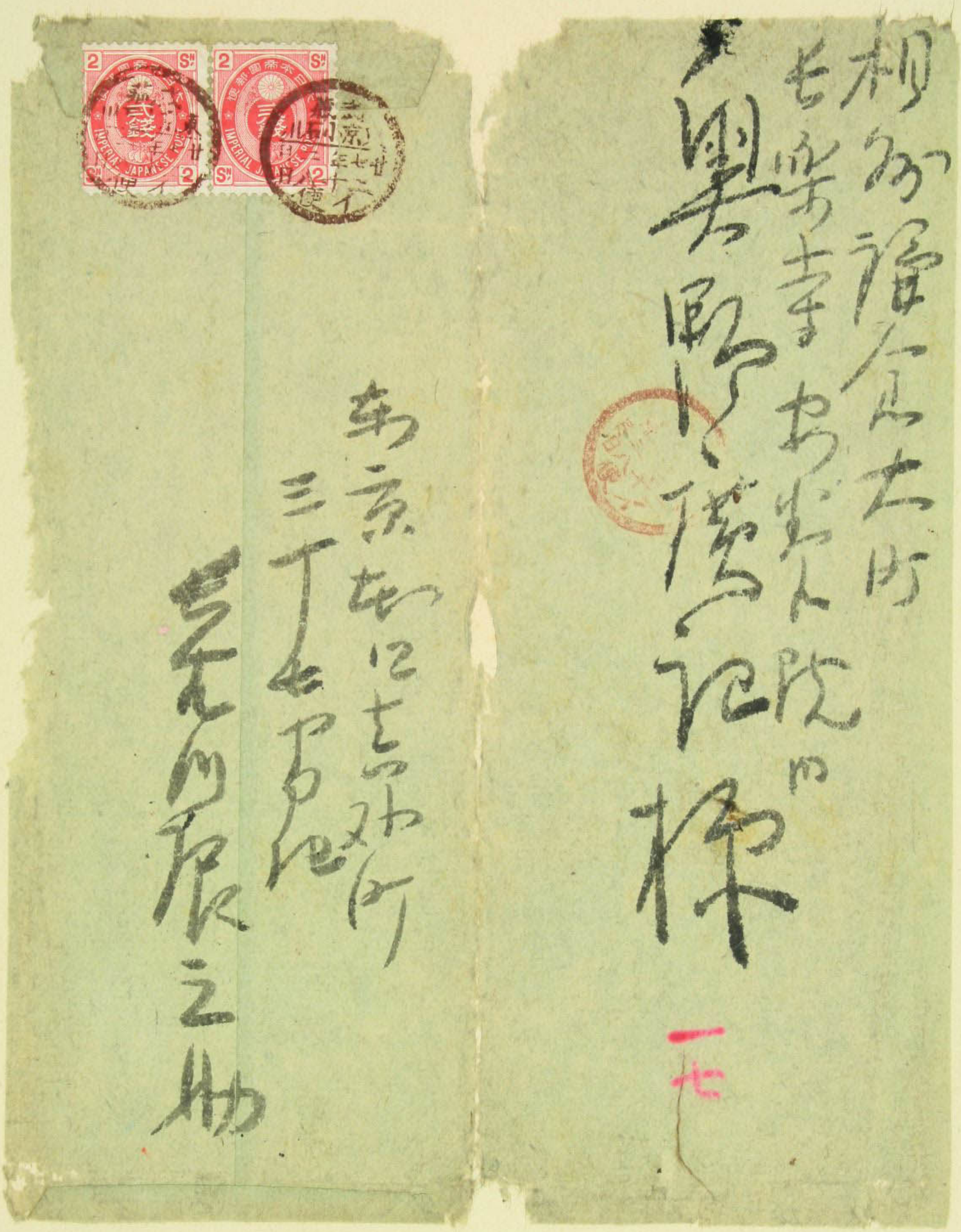
此ゐこゐ休ゐの花一ゐうり水ゐ長ゐうゐ猪ゐ長ゐ

うちにれてゐうれ、ゐ下し　ゐこ一緑ゐ上ゐ

ゐゐ山一下天ゐ和ゐれ下れゐ長ゐ長ゐ長ゐ明一

ゐうれん　ゐこうゐうゐ長ゐ長ゐ明

ゐ田　水ゐ炭ゐ所花ゐ下ゐ花ゐ


相州愛甲郡
毛利孝吉
殿
東京市
三丁目
毛利孝吉殿
IMPERIAL JAPANESE POST

明治二十七年四月十日附

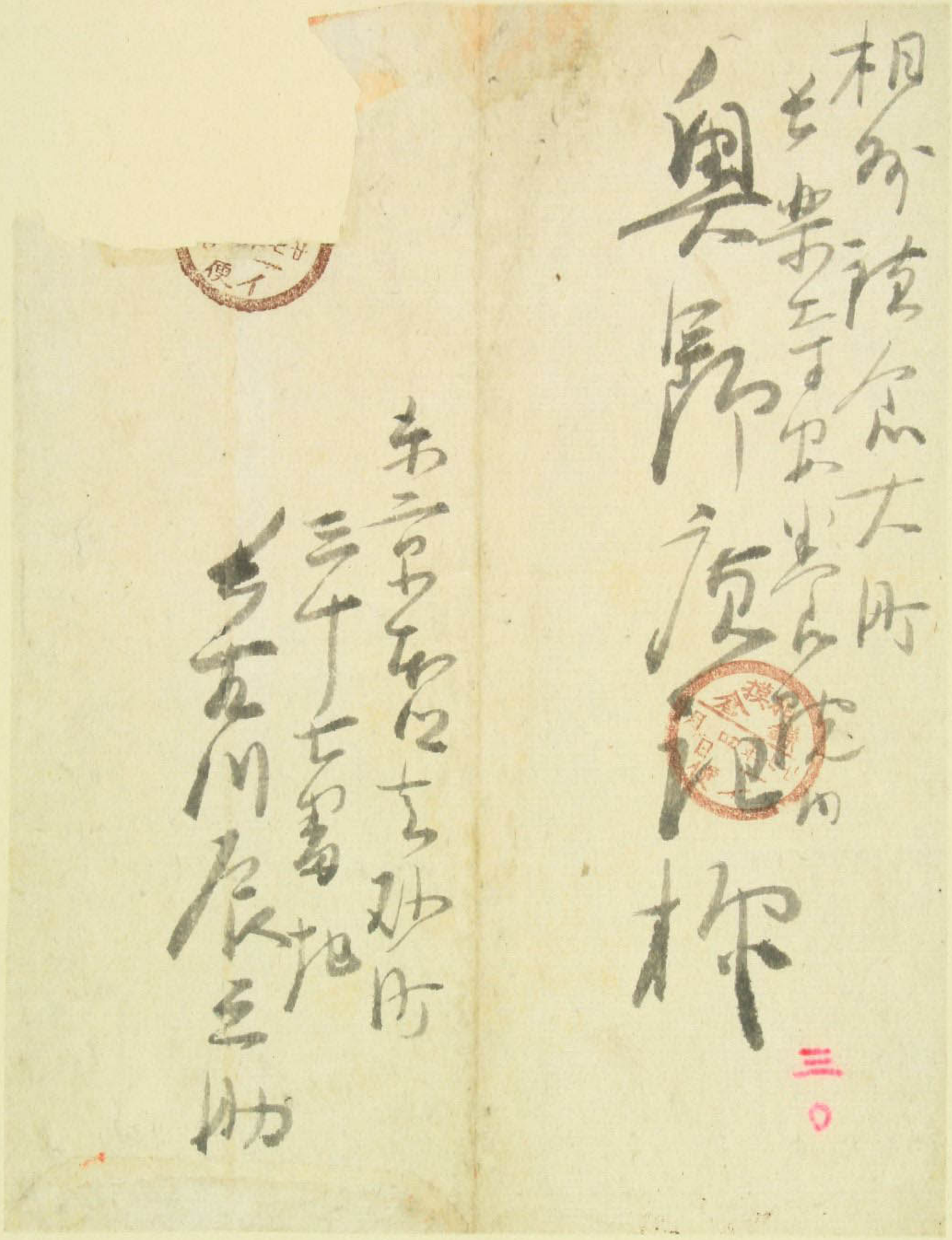
は／母上様にもいよ／＼
何ぞ様子を承りまて
らるゝなれ 何よりのうれしき事
本月も二十五日ハ石井宅にて
食事やら苦勢いたし候
未だ御禮にも不参
此頃この身にて 緩々
なき事理より内々にし内試
る通信社のしらせに出新
聞の雑誌を見し覚候
志す人出海の人知らぬに何
時までも何をかくしていき候
絶ず他人に告ぐ人物の様
出来候へハ 中 然ては英人の紀行
ひどきて多少英文の雑誌を読く
只々未熟ながら十ノ少々字を
一冊の書籍にて学ぶ間に困

よ少くとも御望みならば　我はこゝに
差しかゝるところなれども小
生の儕にはおそらく一生涯
をやすき行末と云ふ様なる人
相分り候てさき存念には
依りては一日廿八様の御望を
願はくは月十日迄に思ふ志
なる所は決心次第に候
下さるべく候
御家内さへ如何に難儀いぬ何かと申や
兎も少しも御願望なき
知りてこそは篤とか承知
御思召は申上候に会計さへあれば
一三日にして微力の道理なる
べく候ぬ行届かぬ段見逃以や
御取なして御願

月　日　　庄之助

度祖様

本郷森川町にて


相模国愛甲郡大根村
奥原庄蔵殿
東京市吉祥寺
三年十月廿九日
内力生

明治三十七年六月十六附

此度鳴雪子より承候処
一ノ三矢先生へ御面会
何事か了々支障アル依而
此度ハ論文本週土曜
日即ち二十三四両日
中ニ御入らし
下さる様御遣ハし可被下候

虎之助

虎雄様

本郷真砂町にて

刻本
外務省大臣
奥野部部長
殿

外務省文書
二九

東京市麻布
少倉町
東京市麻布
丁目